

第 20 回人文学・社会科学特別委員会における主な意見等

○ 人文学・社会科学における研究データ基盤の整備について③（人材育成）

- これまで人文学・社会科学系はフィールドノート等の研究データを図書館・博物館が保存・公開していたが、これからは研究者個人の判断で保存を行っていくこととなるため、様々な点で留意が必要である。例えばインタビュー結果やフィールドノートには個人情報なども含まれているため、データ公開の観点も含め、研究実施前に行うプロセス（研究倫理審査等）を経ていく必要がある。
- 同一の研究分野の研究者がより容易に先人の研究成果を利活用できるということはもちろんだが、オープンサイエンスの観点からは、研究データの異分野での利活用や思いがけない参照により新たな知や価値が創出されることへの期待感がある。そのためにも、分野を広く俯瞰できる次世代のデータキュレーターを生み出せるような人材育成体制や教材の整備にはどのようなものが必要か考えていく必要がある。
- 研究データの公開については、共同研究者や企業からの許可が取れなくて公開できない場合や、個人情報絡んで難しい場合もある。以前は個人を特定できる情報にならなかったものでも、ビッグデータ化が進展することで、様々な調査情報を組み合わせると個人が特定できるようになっているところもある。
- AI を活用したメタデータ作成については、実用レベルまで下りてくるのは質的な観点からまだまだこれからではないか。また、AI で生成できるメタデータと生成できないメタデータもあるので、AI を活用する部分としない部分の仕分けの検討も必要になってくると考えられる。
- 今後は研究データのフォーマットの標準化が極めて重要であると思う。特に海外との共通性を確保していくことも、海外からデータを見つけてもらう観点から重要であると感じる。
- 人文学の研究データの管理においては、根拠資料として、古文書だけではなく、研究ノートやデータ取得時のメモ等といったいわゆるプロセスデータを今後どのように残していくのかも重要な課題になると思う。
- 歴史資料の中には、明らかにその文書自体が存在しない疑文書のような類のものや、存在はするが公開すると著しく誤解を招くような内容を含む資料（例えばある一方的な情報のみが書かれており、片方のみ公開されることで著しく誤解を招くようなもの）など、いくつかステータスが存在すると思われる。特に人文学・社会科学の資料については、今後データの信頼性のレベル付けの整理も必要だと思う。
- 研究データ管理は、人文学・社会科学系研究の再現性を確保するために重要だと思う。
- 研究データをどこまで公開するのかや、更に自身の様々な研究に活用したい場合など、データ公開の取扱いについては、一番初めにデータを取得した研究者の権利を残すことができるよう議論しておく必要があると思う。日本・海外の研究者ともに同じだが、データを公開してしまうことで自身がプライオリティーを失うことや、そのデータが適切

に引用されないということが、一番のデータ公開を妨げる強い要因になっている。まだ使用する可能性のあるデータについては、支障のない範囲で公開するといったような取組も必要であると思う。

- 退職する教員・研究者が所持する貴重なデータに加え、今まさに作られているデータについても、適切にリポジトリに登録され長期にわたって保存されるという仕組みをまずは整えることが重要であると思う。
- 資料の公開範囲について、どんどん広がる方が良いと評価されるものなのか。伝統芸能に関する資料については、秘伝に関する資料もあり、どこまで一般の方が読める形で公開するのかという問題もあると感じている。
- 研究データの公開については、分野や領域によって状況が違うことも念頭に置いた上で議論をしていく必要がある。
- 情報の公開を前提に調査を行うと、得られるデータが限られる形となり、研究がやりづらくなる面も出てくると思う。また、研究者でなければ公開の可否の実情が分からない部分があるので、研究者がオープン・アンド・クローズについて、しっかりと関わっていく必要がある。
- データについては分野の違いもあり公開が簡単ではないこともあるが、何をコアにしてデータ公開を進めるのかコンセンサスをもって、人文学・社会科学が後ろ向きではないということを打ち出した形でのデータ公開が整備できればよいと思う。
- オープンサイエンスについて、理系を中心に議論され仕組み作りまで議論が進展している中、人文学・社会科学系もある程度対応していかなくてはならないが、しっかりとした支援の仕組みがないとなかなか難しい。ただし、人文学・社会科学が対象としている領域は、どのような論理でオープン・アンド・クローズ戦略の説明をするのかという点で、理系と比べてかなり幅が広いと感じられる。そうした本質の議論を研究者が中心となって行っていくことが、まずは重要であると思う。
- データベースの構築について、国立遺伝学研究所などでは非常に厚い体制を組んでいた。それぞれの分野のポストドク以上のレベルの研究者が絡んでいくことが必要であると感じた。

○ 共創による課題設定型・プロジェクト型共同研究の推進について

- 研究成果の把握にあたっては、論文や著作、講演といった従来の研究成果に加えて、多様な研究成果を把握できるようにすべきである。
- 異分野融合研究については、若手など、実は研究のアウトプットを出す場がない等の困難があると思う。自分の分野がしっかりあって、たまに異分野の領域に出ていくことで自分のそもそもの足元の分野の研究を膨らませていくという人が結構いると思うが、異分野融合にどっぷり浸かるとなかなか研究がやりづらいという印象であり、バランスがととても重要であると思う。
- 異分野融合研究にしっかりと取り組んで素晴らしい研究成果を出している学生もいるが、そうした者は自身の研究のバックグラウンドもしっかりしている。一方で、自分の土台の研究を固めたい人もおり、それぞれのやり方を尊重すべきであると思う。
- 共同研究や異分野融合研究は重要である一方で、それ自体を目的化してはならないと考えている。あくまでも問題が中心にあるべきで、そのためにあらゆる手段を使って一緒に解こうとする場合に、異分野間の連携・融合は極めて自然に実現されるようになるのではないか。
- 異分野融合研究の評価は非常に難しく、本当の成果は目に見えづらい。多様な研究者が密接に連携して共同研究を行うということが成果だと感じているが、そこが伝わりにくい。そのため、SNS等を通じて発信もしていく必要があると思う。数値的な評価には出にくく目には見えないがこうした土壌作りが重要であり、今後どのように数値的に見せていくかが課題である。
- 研究者やURAの中にも、研究者同士をつなぐことが得意な人がいるので、そうした者の活動を大学の中でも評価してもっと後押ししていくことが必要ではないか。このような人材の育成も必要であり、様々な事例を持ち寄って互いに知り合う場において、アイデアを集めて情報共有していくことが重要である。
- 異分野融合研究については、どちらかというと、研究者が集まった後に問題が出てくるのではなく、問題のもとに研究者が集う形になると思われる。科学にとってまだ達成・解明できていないテーマといった大きなテーマに対し、それを一緒にやろうということで人が集まってくるという面はやはり強くあると思う。